三勝半七の伝と文芸 (三)

沼波守

歌舞伎で元禄八年（一六九五）十二月、三勝半七の情死があつてすぐ、大阪の岩井座でこれを脚色「茜の色揚」と外題して上演、大当りで百五十日興行したといふから、元禄九年（一六九六）の五月まで打続けた事になるが、それ程好評の狂言が、伊原敏郎博士の「歌舞伎年表」を繰つてみても、他の座で上演された事は見当らない。却つて「茜の色揚」を見物してそれに感激して心中したという久保山十右衛門と五郎兵衛の女房お吉の「千日寺心中」事件は、元禄十三年（一七〇〇）大阪の岩井座や、同じく大阪の荒木座で上演され、また京都でも上演されたとの記事が見えてゐるのに「茜の色揚」上演の記事がないのは訝しい。併し、同年二月十四日、大阪、村山座の記事の内に、

吾妻のお家狂言は「三勝半七」なり。

とある。吾妻は岩井座の「茜の色揚」に三勝に扮した花井吾妻の事であるから、「歌舞伎年表」には見えてゐないけれど、吾妻が諸所で度々三勝を演じて好評であつたであらうとは想像される。

「歌舞伎年表」巻一、元禄十六年（一七〇三）の項に、此の年の秋か。京都の早雲座で、近松門左衛門作の「唐崎八景の屏風」を上演、その中巻に劇中劇として「三かつ半七七年忌」が演ぜられた旨の記事がある。

そして著者伊原博士は、

三勝半七の心中は元禄八年十二月にて、これを岩井座にて演ぜしは翌九年なり。その九年より起算して今年は八年目なり。七年忌といふは如何（コノ下ニニヲ脱セルカ）や。

と追記してをられる。尤な疑問で実際の七年忌ならば元禄十四年でなけらねばならぬ。

この「唐崎八景屏風」は高野辰之博士の校訂、「近松歌舞伎狂言集」（昭和二年十月八日発行）の下巻に収録されてゐる。それに拠るとこの狂言は姉川家のお家騒動に「唐崎心中」を絡み合せたもの。「唐崎心中」は「心中大鑑」の巻二の二に「辛崎の夜の涙」として出てゐる竹屋町通東洞院屏風屋小兵衛とあいの町おったとの心中事件である。「唐崎八景」では清兵衛おあさとなつてゐる。「京大阪堺心中がのこ名寄所付」には、「唐崎一ツ松心中」、忠兵衛廿七、おふさ廿四とある。近松の清兵衛おあさと名が近いから、忠兵衛おふさというのが本当の名であらうと高野博士は記してゐられる。「唐崎八景」は三幕から成つて居り、第一が姉川家騒動の発端、第三が悪人が亡んで善人が栄えるといふ結末、真中が劇中劇の三勝半七で、「大阪の三勝 大和の半七 七年忌 是は狂言の狂言」と題し、姉川左近の清兵衛がおあさを連れて見物するといふ趣向になつてゐる。

清兵衛心中の始りぢや。よい時分に来た。

トいふと、引幕明くれば狂言の始り、祭の練物（ねりもの）三勝と半七、数珠屋の叔父の所にての咄、肝煎善三郎が贋銀（にせがね）のねち、二（ふた）をぢ小姑が手形起請を破る台詞（せりふ）、後に川原で心中する台詞、残らず先立つて評判の心中半七三勝七年忌といふ本に出し、詳しく書載せぬれば、同じ事を爰に写すはくだなれば略する。其の本の通り違ひはなし。（高野博士の校訂）

とある。「心中半七三勝七年忌」といふ本の現存するかしないかすら知らないので詳しい筋を知る事が出来ないのは残念であるが、右の祭の練物、数珠屋の叔父、肝煎善三郎が贋銀、手形起請を破る、川原で心中などの語で、以前の歌祭文や、「心中あかねの染衣」とは可成に異つた筋立であつたやうに想像される。更に想像を逞しうするならば、この三勝半七の場面は京都で、加茂祭の時に加茂川原で心中した事に作られてゐたのではあるまいかと思はれる。肝煎善三郎は今までの今市善右衛門的の役柄であつたらう。「先立つて評判の云々」は、実際の七年忌即ち元禄十四年に出版したといふ意味かも知れない。けれどもそれならば、「先年」とあるべきで、「先立つて」ではやつぱり元禄十六年この劇上演の数ケ月以前程度の意味と解さなければなるまいかとも思はれる。とにかく、実際の七年忌に上演された作を、此時そのまゝに劇中劇として用ゐたのか、実際は九年忌ではあるが、普通の年忌施行の慣例に従つて七年忌を繰下げたものとして上演されたのかは、今はそのどちらとも判定し難い。これより後にも、三勝半七事件が何年忌と題して上演されながら、その上演と伝へられてゐる年と実際の年忌と喰違つてゐる例があるが、それはその時に触れる事にして、参考のためにこの劇中劇の役人替名を挙げると

一、大阪の三勝	太夫	浅尾　十次郎
一、大和の半七	立役	桜山四郎三郎
一、三勝　母		若山　久四郎
一、肝　煎		大森　辰右衛門
一、数珠屋女房		霧波　江口
一、下女　かや		岩井　歌町
一、小　舅		山下佐五右衛門

である。

「歌舞伎年表」巻一、享保元年（一七一六）の条に、

中村座、三ノ替、茜屋半七、酒屋三かつ「禅師曽我」後日。団十郎の五郎、由井ケ浜にて首きられ其儘禅師坊となり、花道へ出らるる所、見物興をさます。二番めは「半七三かつ心中」半七（団十郎）利介（広次）。

との記事がある。これが此書に於ける江戸での三勝半七の初見で、事件後二十二年目である。この時の三勝半七はどんな内容であつたかわからないのが残念であるが、利介といふ今までに見えなかつた役名が見え、それを当時立役上々白吉の位付である大谷広次が扮してゐるところを見ると、相当重要な役であつたらうと想像される。だからこの劇は今迄の物とは可成り異つた内容のものではあるまいかと思はれる。そして今までのやうに「笠屋三勝」でも「美濃屋三勝」でもなく、「酒屋三勝」となつてゐる点が注目される。ところでこの「歌舞伎年表」の記事については少し疑問がある。

中村座、三ノ替、茜屋半七、酒屋三かつ「禅師曽我」後日。

といふのは、三ノ替として、「禅師曽我」の後日として半七・三勝を出したといふ意味かと思はれるが、さう解すれば後の

二番めは「半七三かつ心中」云々

が訝しい。強ひて解すれば一番目に「禅師曽我」の後日、その二番目は「半七三かつ心中」であつたといふ意味かもしれないが、それはさうとしておくとすれば、中村座は去年の正徳五年（一七一五）十一月顔見世に何かの狂言を出し、今年正徳六年（享保と改元されたのは六月二日）正月にその二ノ替として「禅師曽我」、そして三ノ替が「禅師曽我」の後日、その二番目が三勝半七だといふことに成るのであらう。そこで「歌舞伎年表」正徳五年の条を見ると、

十一月、中村座、顔見世「金ノ冠婿頼政（とんれい）」。正徳六年（即享保元年）正月十一（十八）日、下谷池ノ端、柳原式部大輔屋敷より出

火。中村、市村両座類焼（四年目）。

二月廿二日より、中村座、仮普請にて興行。春狂言「式例和曽我」……二番目「草ずり引」。

とあつて、中村座は前に引用した『三ノ替、茜屋半七、酒屋三かつ「禅師曾我」後日」。』といふ所に続くので前に「禅師曾我」が見えてゐない。これを見ると前の引用文「三ノ替」云々は、三ノ替として一番目が「禅師曾我」、二番目がその後日として「半七三かつ心中」といふ意味かとも思はれる。これはこれまでとしておいて、三勝半七事件は江戸では事件後二十二年目の享保元年に中村座で初めて上演せられ、「半七三勝」であつたといふ事になる。

以後京阪には三勝半七上演の事は見えず、享保四年（一七一九）にやはり江戸で、市村座の春狂言、「福寿海近江源氏」の二番目に「三勝心中」が上演せられてゐる。事件後廿五年目に当つてゐる。この「福寿海近江源氏」は、一番目は佐々木盛綱、高綱の事に曾我、その筋をひいた二番目は梅の由兵衛に三勝半七を綯交ぜたもののやうである。今次に三勝半七に関する部分だけを抽き出してみると、

▲三甫右衛門……二番目、方便の美濃屋平左衛門。大阪岩井座の狂言見物の体にて、いろは組との喧嘩に草履で叩かれての述懐。身に望みあるゆゑごんざるさと、言はう〳〵と思へど勘忍するとの落し。ごんざるのお家ゆゑ、大に当る。……

▲小川善五郎……二番目、金剛鉄の伝兵衛。草履二足もめ、さま〴〵の言廻し。其後千日にて心中へかけ付、かやうな事覚束なく、さま〴〵になつて心を付けましたとの言ほどき。

▲中村三郎四郎の今市善右衛門。半七、三勝をこねらるゝ憎さ。

▲袖岡政之助……後に三かつ母となつて異見。

▲三条勘太郎の妹かんじゆ。敵の屋形にて曽我五郎となり、十番切の所作。二番目、笠屋三かつ。善右衛門に悪口いはれ無念がつても金が敵。半七に力をつけて心中の思立。千日へ行く。

▲市村竹之丞の藤綱。方便に茜屋半七となり、千日寺心中。一中上るりにて勘太殿（三勝）と手を引ての道行。

このたびの「三勝心中」ハ小川善五郎の思付か。廿五年前大阪岩井座に興行の時、佐次右衛門とて小詰なりしが、翌年十一月、岡田佐馬之助について下り、小川善五郎と改名云々

右のやうである。これでみても可成り複雑な筋立であつたと思はれる。

ついで義太夫浄瑠璃に、紀海音作の「笠屋三勝二十五年忌」がある。これが義太夫節での三勝半七の最初の作である。これが上演されたのは、明和版「外題年鑑」には宝永六年（一七〇九）八月二十三日とある。この年は十五年忌に当つている。それをいかに何でも「二十五年忌」と外題するのは非道すぎる。「南水漫遊」には享保元年（一七一六）の上演とある。この年は二十二年忌に当るから事実に近い。実際の廿五年忌は前述したやうに享保四年であるが、たかが浄瑠璃の外題の事であるので、実際の二十五年忌が享保四年であるから享保四年（一七一九）上演と断定する事も出来ないかも知れない。

この「笠屋三勝二十五年忌」は水谷不倒氏の「世話浄瑠璃大全」の下巻に収録されて活字になつてゐる。上、大和五条附近、中、大阪長町平左衛門住居、下、道行千日寺、の三巻からなつてゐて、その大筋は、

大和五条の茜屋半七は女舞の笠屋三勝と馴染んで、二人の間におつうといふ子まである。だから半七は大阪へ出て五日と三勝に会はぬ月はないといふ程の放蕩ぶりなので遂に親から懲らしめの勘当をされた。半七の女房おすがは貞節な女で、水垢離を取つたり塩断ちしたり、初瀬へ参籠して断食したりして半七の無事を神仏に祈つて居る。三勝の叔父（三勝の母の弟）平左衛門は義侠心の強い男で、三勝と半七にとつては頼もしい後援者である。この平左衛門はある人の手代の受人になつてゐたところが、その手代の引負銀（ひきおひがね）、銀四貫五百匁を弁償しなければならなくなつたので、今市善右衛門から、期限は十一月晦日として、三勝を質としてその銀を借りた。善右衛門は悪い奴で三勝に惚れて居る。平左衛門は三勝に芝居をさせて大和路を興行して廻つたが反つて損をした。善右衛門からの借銀の返済のあては、半七の工面の付くのを待つより仕方がなくなつた。期限が切れたので善右衛門は三勝を連れていくといふ。平左衛門は三勝を渡しては半七への義理が立たぬと殴合ひの喧嘩になつたのを半七が仲裁に入つて、自分は三勝とは縁を

切つた。明日三勝を善右衛門へ嫁入らせる。仲人は自分がするといふので、善右衛門は喜んで帰つてゆく。

平左衛門は半七に、三勝と縁を切つて善右衛門へ渡したら自分が喜ぶかと見られたのは残念だ。家財悉皆売払つても銀が不足で、丸裸で出てゆくのを世間の者は横着な奴と悪口はいふまい。善右衛門の訴へで代官所で自分が悪いとなつて手錠をかけられても入牢させられても、自分は決して後悔はしない。三勝と縁を切らうの、善右衛門の嫁にならうのといふやうな二人は見るも穢らはしい。見事夫婦になるまでは、再び此の内へ戻るなと罵つて二人を戸外へ突出した。

既に情死と覚悟してゐた三勝と半七とは涙に咽びながら千日寺に辿りついたのは、はや暁であつた。二人が死にに出たと知つた平左衛門はお通を背負つた三勝の母と近所の人々と共に後を追つて此処まで探しに来た。二人は見付けられじと、あちこちに隠れ忍んだ。探し倦んだ人々は生玉、今宮辺を手別けして探さうと立去つた。あとに二人は夜明けの鐘に驚き、褄と褄とを結び合せ、半七が三勝の咽を突いて殺し、つゞいて半七自身も咽を突いて、

三勝が、死骸の上に重りて、共にむなしき死顔の、猶うつくしき霜月の、霜とふりにし一昔、廿五年の夢を又伝へて筆に残しけり。

といふのである。

この海音の作は先行の諸文芸に縋つて脚色されたものであることは右の大筋を見ただけでもよく解るであらうが、例へば、

一、三勝を笠屋三勝とし女舞の太夫としてゐるのは

歌祭文の「三勝心中」上、下、「新色五巻書」の「心中あかねの染衣」がみなさうである。踊音頭の「三勝心中」では女舞であつたか否かははつきりしないけれど笠屋三勝とは明記されてゐる。近松門左衛門作の浄瑠璃「心中刃は氷

の朔日」（宝永七年―一七一〇―、六月十六日、竹本座）の下巻に、心中の由来を述べている個所がある。その一節に

笠屋三勝舞の袖、褄と褄とを引寄せて、結ぶ無常の薄煙千日寺のはかなしや、別れしあとの寝姿は、夜半の鐘に目をさまし、かよ〳〵と乳呑子の歎きを捨てし修羅の道、魂は冥途に到れども魄となりたる今の世の、おつうは母の形見ぞや。

とある。因みに近松の「氷の朔日」は明和版「外題年鑑」には宝永七年（一七一〇）六月十六日上演となつてゐるが、博文館の昭和版「帝国文庫」の「近松世話浄瑠璃集」の解題で守随憲治博士は、作中に「一昨年の大地震」の句がある。これは四年の地震を指すと見られるから宝永六年上演だとして居られる。

二、三勝の子の名をおつうとしてゐるのは

歌祭文の「三勝心中」の下「別れの鐘」、踊音頭の「三勝心中」、近松の「心中刃は氷の朔日」。

三、三勝を質として借りた銀を返す事が出来なくなつたのが心中の原因であることは

歌祭文の「三勝心中」、「新色五巻書」の「心中あかねの染衣」、踊音頭の「三勝心中」。

四、銀の貸手今市善右衛門は大和に住む人らしいのは

歌祭文の「三勝心中」上　に今市善兵衛とあり、その大和在住らしいのは、三勝が半七に相談しようと駕籠で大和へ急くところに、

かゝる折節向ふより、今市善兵衛は大阪をさしてぞ出づる脇差の

という句がある。

「茜の色揚」に今市善右衛門の役名がみえる。勿論大和在住かどうかはわからない。

新色五巻書、「心中あかねの染衣」では大和の下市の善右衛門。

五、千日寺で心中の時三勝があとに残るおつうを思ひやつて悲しむ事、半七の褄と自分の褄とを結び合せた事は歌祭文の「半七三勝別れの鐘」に

羽織打敷き坐を組みて褄と褄とを結びつつ……娘おつうは我が乳房、尋ねさすりて寝入りしが……

「心中あかね染」、五、「心中名取川」に

半七羽織をぬいで下に、椿の花を前にさし、さや口に書置ねんごろに認め、互にうはがへのつまをくゝりやいしは、二世まで結ぶといふ深心にてぞ有べし。……

これにはおつうの事は見えてゐない。

踊音頭「三勝心中」

いとし我が子をふり捨て置いて、死ぬる心をかはいと思うて、……いつもおつうが目を開く時分、母よ〳〵と尋ねて泣こが、死する命は惜しからねども、流石親子の別れの絆、切るに切られぬ事こそ悲しと、……笠屋三勝袱紗を出して、褄と褄とをしつかと括る、……

近松の「心中刃は氷の朔日」。これは前に引用した。以上のやうである。「茜の色揚」や近松の「七年忌」の内容がわかると、この海音の「廿五年忌」とどれ程の関係があるかが明白になるが、それが出来ない事はまことに残念である。

この海音の「笠屋三勝廿五年忌」の下、千日寺心中の辺の文章は、踊音頭の「三勝心中」と酷似してゐる。海音はこの辺は踊音頭に拠つて綴つたのであらうと思はれる。

おつう(実説ではおつま)をハッキリと半七と三勝との間に出来た子供としたのは、この海音の作が最初ではあるまいか、前述のやうに先行作におつうがあつても三勝の子とはわかるが、半七の子かどうかははつきりして居なかつたのが、海音の此の作以後の浄瑠璃「女舞剣紅楓でも」、「艶姿女舞衣」でも、半七と三勝との間におつうとい

ふ女の子があつた事になつてゐる。海音はおつうが半七と三勝との間の子とはしたけれど、三勝がおつうに心を引かれる事は敍しながら、半七のおつうに愛情を示すやうな描写のないのは何故であらう。私は実説の三勝の書置でおつまは半七の子ではあるまいと推定しておいたが、それが事実であつたのか先行の諸作が、三勝のおつうに対しての悲嘆を描くのみで、半七のそれに筆が及んでゐないのに眩惑されたからではあるまいか。先行の諸作はおつうは半七の子ではないといふ立場で筆を取つたとすれば、半七がおつうに愛情を示す描写のないのは頷く事が出来るし、「心中あかねの染衣」におつうの事が全く無いのは、おつうの事は三勝の半七に対する愛情の純粋を妨げるものとして意識的に触れなかつたのかと思はれる。乍然海音はおつうは半七の子であると創作したのであるから、当然半七のおつうに対する情愛を示すべきであつた。それが海音のとは筋の違つてゐる先行諸作に引摺られて筆が及んでゐないといふ事は、何んといつても海音の不注意であつたといはねばなるまい。

半七におすがといふ女房があつて同棲してゐたといふ事も海音の創作であらう。このおすがが後の諸作では許婚の娘お園となるのである。このおすがは

賤しい百姓の子なれども、むつきの中からことしまで、もめんを身には付ねども、

といつてゐるから、豪農の娘である。このおすがは大変に貞節な女で、半七が三勝に現(うつつ)をぬかして両親から勘当されると、半七を怨みもせず、自分の身を苦しめて半七の無事を神仏に祈つてゐる。まことに可憐な女で、その半七に対しての真実心はよく描けてゐる。後作がこれを粉本としてお園を作つたのは成程と思はれる。このおすがを描き出したのは海音の大きな手柄である。

平左衛門を実説の三勝の書置によつて推察される人物とは反対に、貧しくはあるが義侠な人物としたのも海音が最初であらう。そして三勝の母の弟と血統を明白にしたのも海音であらう。平左衛門が姉に対する情愛、姪の三勝への

心遣ひ、引いては半七への義理だて、おつうへの恩愛、善右衛門の脅迫にびくともせぬ硬骨、痛快な男子の面目が躍如としてゐる。後の作が多くこれに放つたのは道理である。この硬骨漢平左衛門を作り出したのは海音の第二の手柄である。

海音の作では、大和の半七の家を相当な資産家としてゐる。おすがが「五条において隠れなき茜屋の半七」といつてゐるし、半七が身持を慎んで勘当を許されて再び家に帰つたら、五貫目や十貫目は三勝に「つい取かへてやらしやんせ」とも云つてゐる。

情死の原因となつてゐる借金は、歌祭文「三勝心中」には、「身を書入れの手形金」とだけで銀額は明記されてゐない。「新色五巻書」の「心中あかねの染衣」には、丁銀三貫八百五十目。踊音頭の「三勝心中」は「あだな金故身を書入れの」とだけで銀額は記されてゐない。そしてこの海音の「笠屋三勝二十五年忌」では銀四貫五百目となつてゐる。一体この銀四貫五百目といふものは現在にはどれ位の金額になるのであらうか。参考までに「読史備要」の「金銀米銭相場一覧」をみると、享保元年（前述のやうに海音の此の曲の上演年には異説があるが、二十五年忌に近い「南水漫遊」の享保元年をとつてみた）。米百石の価は通用銀百三十貫匁とある。銀四貫五百目は米三十四石六斗一升余に当る。昭和三十六年現在の米一升の価を仮りに百二十円とすると、四十一万五千三百二十円となる。おすがが三勝に借してやれといふ五貫目ならば四十六万千五百二十円に当るし、十貫目なら九十三万三千二百十円となる。かう考へてみると四貫五百目の銀は相当な額であり、五貫目や十貫ならついちよつと三勝に立替へてやり得る茜屋の身代は「五条において隠れなき」と云ふのも無理ではないと思はれる。

銀高四貫五百目の質物には、其三勝霜月晦日過たらば、其方へ引取て遊女奉公にやり成共又女房になされう共毛頭かまひ候はぬと、手形証文取ている

と善右衛門が云つてゐるから、三勝と半七とが千日寺で、「夜明の鐘に打驚」いて情死したのは十二月の朔日の夜明であつた筈である。にも拘らず

共にむなしき死顔の、猶うつくしき霜月の、霜とふりにし一昔

とあるのは、踊音頭「三勝心中」の

過ぎし亥の年、霜月七日霜と消え行く

の句が頭に刻み込まれて離れなかつたが為でもあらうし、「死顔の、猶うつくしき霜月の」は千日寺にあつたといふ一蓮託生の石碑に刻まれてゐた追善の句「死顔の猶うつくしき朝の霜」に拠つてゐることは云ふまでもない。手形の期限を霜月晦日としておきながら、音頭や追善の句に引かれて、「霜月や霜とふりに一昔と」筆を辷らせたのは海音の粗忽であつた。

この曲での半七はだらしの無い男である。大和巡業中の三勝が偶然半七に路傍で逢つた時に、

跡の月から大和路へ、叔父様の芝居に来て、嬉しや近い所ぢやげな、あうて咄して、どうしてと、そればつかりを楽しみに、思ひ立たる甲斐もなう、文をやつても返事なく、人遣はしても留守ぢやといふ、是はどうした仕かたぢやと、舞台勤むるその内も、どう舞うたやら踏んだやら、本に誓文今にまだ心の舞が納まらぬ、気の毒らしい取沙汰を、そつと聞いたる事もある。そのうへ今日のなり姿、ついにめされぬ木綿物、しよげしよげとした御顔の色、気にかかってなりませぬ。

と心配して尋ねたのに、近日親仁が隠居して家督を半七に譲る筈になつてゐる。それまではと身持を慎んでゐるからだ。家督さへ継いだなら、三勝は立派な私の女房だ、安心しろなどと、一時の気休めを云つて欺いたが、そこへ来かかつた善右衛門に、勘当された事を素破抜かれ、三勝は貸銀の抵当だ。期限が切れたら我身の女房、指をも指すなと耻かしめられて閉口したり、三勝との談合を女房おすがに逐一聞かれたと知つて、面目無い耻かしいから死なねば

ならぬと騒ぎ出す。それをおすがにとゞめられて意見をされると、今度は親人はこの半七を勘当しておすがに入壻を取つて家督を譲る考だといふ噂を聞いた、お前はそれを喜んでゐるのだと嫉妬をして怒る。おすがから真実の心を告げられると、また感激しておすがに謝つてすぐに旧情を温める。銀の工面がつかぬので死ぬと決心して長町に三勝を訪ね、善右衛門の許へゆくのが上分別と三勝の気を引いてみて三勝に怒られ、三勝の自殺の決心を知つて喜び、二人で情死と相談がきまると、自分の死骸が大和の在所へ送られて、女房おすがが、

抱き付いても、取付いても、泣きもだえん折ふしに、三勝夫と書気けし、かいなの文字を見たならば、すこしは腹が立つであろ。

と三勝の前で女房の惚気を云つて、自分の腕の入痣を消させるなど、薄つぺらで、嫉妬焼きで、自分勝手で、まことに詰らぬ男だ。こんな男に情を立てゝゐるおすがや、命まで捨てた三勝の心が不思議な位だ。不思議なと云ふより馬鹿げてくる。

此の曲で三勝と半七とが最後の盃を酌み交すのが、「新色五巻書」の「心中あかねの染衣」同様中村屋となつてゐるのは、「南水漫遊」にある半七の定宿中村屋安右衛門に拠つたのであらう。水谷不倒氏は「世話浄瑠璃大全」下巻、本曲の解題で

海音の作としては最も活動に富みたるものにて、傑作の一なり。

といつて居られる。黒木勘蔵氏は昭和版「帝国文庫」の「紀海音並木宗輔浄瑠璃集」の解題で海音の作風に就いて

海音の特色は一言之を掩へば理智的である。その文は叙述的であり、客観的であり、時に場面の描写よりは筋を物語る平板なる叙事に堕する嫌がある。彼も亦近松と同じく義理と人情との葛藤をよく描いたが、その場合には、常に人情を人て義理の犠牲として、徒に空疎にして概念的の義理を強調しようとする傾がある。されば浄瑠璃作者としての天分に於ては、遠く近松に及ばないとしても、また一方に於ては、作の結構布置の整然として如何にも理に詰んで居る点などは、反つて近松に見られない処であ

る。

と記してゐられる。

三勝やおすがや平左衛門をみるといかにも不倒氏の「活動に富みたるもの」と思はれる。また大和、平左衛門の内、千日寺と場面を配置して事件の推移を叙してゐるところなど、黒木氏の「作の結構布置の整然とし」とある通りであるが、三勝に腕の入痣を消させるところなどは、黒木氏の云ふ「常に人情を以て義理の犠牲として、徒らに空疎にして概念的な義理を強調しようとする」缺点を十二分に曝露してゐる。いかに三勝やおすがや平左衛門がよく書けてゐようとも肝心の半七がこんな性根のない男では見物聴衆の同情は引き得ないであらう。これは実伝の半七がこんな男であつたからででもあらうが、とにかく此の曲は後の三勝半七の作に大きな影響を与へた作でありながら、半七が人の同情をひき得るやうに描かれてゐないといふ致命的な缺点を持つてゐる。そのせゐでもあらうか、この曲は「近世邦楽年表」の義太夫節の部をみても、その後上演されてはゐない。

（未　完）